

「カモ」のミヤ(上賀茂・下鴨神宮)が再興されます。

ヒトの世になってよりは、忘れられてきたのでした。アスス721年のイクメのキミ(垂仁天皇)に至るまでの700年ほどの間、寂れるままでした。ヤマトウチにて二朝廷並立時代が終焉をむかえて、奈良盆地にミヤコが統合されたからですね。

賑やかだったのは、カミヨの終わりの頃でした。トヨタマヒメが来て、弟のタケスミがお祭りをするようになりました。またウガヤフキアハセスさまが常のミヤとなさっていたのが下鴨の方でした。タマヨリヒメの不思議な出来事があって、タケヒト(神武天皇)さまのご誕生があります。これをハナに、寂れていったのでした。

そもそも、建国の中心となったフウミ(琵琶湖)の湖岸地方からすると、比叡山の後側の位置が京都盆地でした。今は山城と書きますが、古くは山背と漢字表記がされるように、表に対して後ろ側でした。

翻って、思い見ますと、アマテルカミの時代にはカタのカミが先端技術の農業を興していたのでした。伏見のところですよ。

その後に、京都盆地はニニネさまの興された開発で発達発展しました。京都盆地の開発の際、下鴨ではセミの小川(御手洗川)にミナツキのはらい(旧暦6月の末)の行事を「モリカミがおこなっていました。伏見のもう少し南の巨椋(おぐら)のと

ホ10-45	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-46	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-47	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-48	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-49	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-50	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-51	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-52	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-53	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-54	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-55	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-56	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-57	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-58	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-59	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-60	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-61	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-62	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-63	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-64	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-65	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-66	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-67	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-68	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-69	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-70	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-71	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-72	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-73	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-74	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-75	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-76	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-77	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-78	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-79	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-80	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-81	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-82	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-83	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-84	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-85	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-86	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-87	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-88	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-89	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-90	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-91	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-92	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-93	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-94	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-95	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-96	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-97	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-98	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-99	ミコトノリ	タマヨリシタハ
ホ10-100	ミコトノリ	タマヨリシタハ

ころは、秀吉が開発しました。巨椋池の7年からおこなわれます。4万人分の穀倉地帯となりました。

37、トリあわせ タチハナの アヤ

十一代 垂仁天皇 三分割の下

³⁷⁻¹ タマキミヤ（奈良県桜井市巻向）にミヤコ（首都）のあった、イクメのキミ（垂仁天皇）の27年（アスス715年）ハツキ（正月）の事でした。ナカラミ（ウラカシマさんか？この時、ウラカシマさん119歳）と供に、ウラナイをしました。

イクサウツワ（武器）をミテクラ（祭りの代）にして良いものかどうか？と。ウラナイの結果は、「ミテクラにして良し」と出ました。そこで、ユミヤ（弓矢）、タチ（ツルギ）をモロのヤシロに納めしめました。また、カンヘ（ミヤ守り人）を定めて、イクサの道具のウツワを祭器としてお祭りを始めたのでした。

³⁷⁻² 28年（アスス716年）カンナ（10月）5日に、ヤマトヒコが亡くなりました。ヤマトヒコは、初代ミツエシロ（斎王）のトヨスキヒメさんの弟です。ヤマトヒコは、キのアラカトへの娘さんのメクハシヒメと、ミマキのキミ（崇神天皇）との間にお生まれになったミコ（皇子）です。ネツキ（11月）2日にツキサカ（橿原市桃花鳥坂・トキ）にオモムロ（遺体）を納めました。近習にハヘル（侍る）人達を生きながらに埋めしたら、叫びながらに亡くなってゆきまして、イヌ（犬）やトリ（鳥）が漁（あさ）って食べます。この有り様を、お聞きになったイクメのキミはアワレ（哀れ）に思われるのでした。そこでミコトノリしておっしゃいます。

「生きを恵むことなくて、カラ（死に行くこと・枯ら）するは、痛ましきかな。

伝統とはいえ、オイマカル（殉死）のフルノリ（古くからのノリ）も、良からぬミチは止むべしぞ」

ミツルナヒ

③ 殉死はオヒマカリと言います。タケヒトキミ（神武天皇）の崩御の際に33人のオヒマカリがあつて、それ以降に伝統となつていったものでした。大陸的な雰囲気があると、わたくしは思います。

³⁷⁻⁵ 30年（アスス718年）のハツ（正月）6日に皇太子を定めるため、ミコトノリしておっしゃいます。

「ミコ（皇子）のオソキネ（ニシキイリヒコ）と、タリヒコ（後の景行天皇）との二人に尋ねます。望む所を各々申すべし」

兄のオソキネは申し上げます。

「弓矢得ん」

弟のタリヒコは申し上げます。

「クライ（位）得ん」

そこで、イクメのキミ（垂仁天皇）は二皇子の望むままに、兄には弓矢を下賜なさいます。そして、おっしゃいます。

「弟はクライ（天皇位）を継ぐべし」と。

ミツルナヒ

④ 兄のオソキネさん（ニシキイリヒコ）はイソノカミ（石上神社）を創建する事になります。弟のヲシロワケ（タリヒコ）はみくらいを継ぎます。12代の景行天皇さんです、この時代豊かさに引きずられた感を、わたくしは思います。

イクメのキミ（垂仁天皇）の兄もそうでした。兄のトヨギイリヒコは夢見でホツマヲシとなりました。古墳時代に入

つて、兄と弟と2代続けて、兄は武力に傾きました。

37・7 32年(アスス720年)のフツキ(9月)6日に、正皇后のヒハスヒメさんがお亡くなりになりました。さて、ミオクリ(葬儀)のことをどうするか? オヒマカリをやめようと、アスス716年に宣言されていたのでした。ミコトノリしておっしゃいます。

「先のヤマトヒコのミオクリに際して、オヒカレ(強制的殉死)が良くない事がはっきりしました。オヒカレを無くしてのミオクリをする為に、どのように変更すると良いか?」ここにノミのスクネが申し上げます。

「生けるヒトを埋めることは、伝統とはいえ、宜しからざるやり方で御座います。もっと、良い方法を考えます」

ノミのスクネは、出身国のイツモ(出雲? 桜井市の出雲? 長谷寺の西・朝倉の東。タエマはキより、ノミはツにホ35・35。山陰の出雲が適切)のハシヘ(陶器職人)を多くタエマ(御所市当麻)に招き寄せました。そして、ハニテコ(陶器で作ったヒト)や種(くさ)々のカタチ(形状)のハシモノ(須恵器の物形)を献上しました。ノミのスクネは言上します。

「今より後には、このハシモノを、生けるヒトなどに代えてミササキ(御陵)に植えてミオクリを為すと宜しいのでは御座いませんでしうか?」

イクメのキミは喜ばれまして、ミコトノリなさいます。ハニワと命名なさいました。

「ナンチ(汝)がハカリ(考案・提案)は、吾がここに適うものです。とっても良い方法です。ハニワの立て物をミオクリに用いる事を、これからのやり方にすべし」

と、定まりました。ヒハスヒメのご陵は、現代の奈良の近鉄の西大寺駅からほど近い佐紀古墳群にあります。佐紀山稜古墳です。春や秋など気候の良い時に参拝をなされると、とても良い心地の雰囲気を感じることが出来ます。このご陵がハニワの初めて据えられたみハカだったことは、感慨深いことです。すなわち当時も、イクメのキミは、ノミのスクネをお褒めになって、カタシの土地(ホ31・6にカタシホ、奈良県大和高田市片塩町、石園座多虫玉神社の付近か?) 3代安寧天皇のミヤコ(ところ)をさらに下賜なさいましたのでした。

(以前にノミのスクネは、タエマのクエハヤの土地をスマサの勝負で得ていました。現代の当麻寺の付近、ホ35・35)そして今回はさらに、ハシのツカサ(ハニワの製作ツカサ)の職名も賜ります。

37・12 33年(アスス721年)のことでした。ミワ(大神神社)のタタネコ(オオタネコ、112歳)がヤマシロ(京都盆地)のタチ(館・候補地が多い。コモリさんの子供たち)に行った時の事でした。ヤマシロの有力者のオオクニ・サラスが困り事の相談をしてきました。

「ムスメ(娘)のカマハタが3軒のイエ(家)から求められています。有り難いことなのですが、何のイエに嫁がせても、他の2軒から恨まれてしまいます。この悩みにアドバイスをして下さいませんでしうか?」

タタネコも答えるべき回答がすべには出てきませんでした。そこで、言います。

「明日には、カモカミ(下鴨・上賀茂)に詣でますので、そのみ前にて定める事にしまし
よう」

そして翌日、タタネコはオオクニ・サラスを伴って、ミラヤのカミ(下鴨神社、ウカヤフキアハセス)にニキテ(幣)を奉ります。

荒廃して損壊してしまっているのでは、イツ（お守りくださる力）も細い事です。衰おとろいゆく兆（きざ）しになります」

ミツルナビ

③ ミアレ（御阿礼神事）は例年5月12日におこなわれます。葵祭の取っ掛けのお祭りです。荒れ果てたおミヤに対しての慙愧の念を表すお祭りです。700年も忘れられた。

イクメのキミは聞こし召されて、タタネコのマコ（子孫）のクラマロをイワヒメシに任じられます。オオカモのカハネを賜ったクラマロに、カモのヤシロ（上賀茂神社・下鴨神社）を新しく作り変えよ、と、お命じになられるのでした。

③ 33年（アスス721年）ネツキ（11月）モチ（満月・15日）にミラヤのカミ（ウカヤフキアハセス）を、建て替えたミヤ（下鴨神社）にお遷しします。

ミツルナビ

④ 同じ年の11月にミヤのお遷しです。現在の神社建築ほどには大規模な建築物ではないでしょう。

翌日の16日にはワケイカツチのカミを新しいミヤ（上賀茂神社）にお遷しします。オオタネコ（タタネコ）はサラシカ（勅使）となってニキテ（幣）を納めます。

③ 34年

③ 34年（アスス722年）に、ミユキ（行幸）のために、カモまでの道路やハシ（橋）を直します。特に、ウチハシ（宇治橋）を作り、キ【東のか？ 詳細は未詳】のキツ（木津川）は仮橋を設けます。

ヤヨイ（3月）ハビ（1日）に、イクメのキミは、カモにミユキ（行幸）をなさいます。ヤストモ（80人のお供）を揃えられて、タマキミヤ（桜井市巻向）を出発なさいます。キツ（木津川）を渡り、タマミツ（玉水）にご宿泊なさいます。オオクニ・サラツのタチ（館）です。

3月2日にはカアヒ（下鴨神社の境内の河合神社）にミテクラ（ニキテなど）を、お納めになります。この日はヤマシロ・フチがミアエ（ご馳走）をしてお持て成しにつとめました。

③ 3月3日

③ 3月3日にキフネ（貴船神社）を詣でて、カモ（上賀茂神社）のワケイカツチのオホカミ（ニキネさん）にミテクラを納めるのでした。この際に、余興でカモツミ（トヨタマヒメの弟のカモタケツミの子孫）が、ニイトノ（新築のミヤ）の前でトリケアフ（鶏の蹴り合う競技）をしました。イクメのキミも楽しんでおいでしてご覧あそばしてられました。その、綺麗な鶏を誉めてフランヘ（子供）が言うのでした。

「いよ！ カマハタよ（カマハタみたいな美しい鶏）」と。

イクメのキミは「カマハタ」の意味が判りません。マテ（両手、左右）に居た人にお問いになります。

「カマハタは、何？」

お傍（そば）の人が、大流行りのウタのことで、と、答えて申し上げます。

「オホクニのサラスさんの娘さんが評判の美人で、アメ（天下）に輝くカマハタさんと、イロ良き（綺麗な）トリをはやして子供が言うので御座います」

③ 3月4日

③ 3月4日にはウチ（宇治）に行かれました。ウチカワ（宇治川）のほとりでおっしゃいます。

「良き人得んとなるならば、シルシ（騒るし・検るし）あれ」

ホコを手にとられて、お祈りになってオオカメ（大きな亀）を突きますと、カメが石になりました。

「これは、シルシである」
と、イクメのキミはおっしゃいますのでした。ウチ(宇治)の
カメイシです。

ミヤコに戻られたイクメのキミは、カマハタトへさ
んを呼び召されましてキサキとなさいます。そして、イワツ
クワケのミコ(トリヒコ)を儲けるのでした。

ミツルナビ

⑤ イワツクワケさんのだいぶ後の子孫が継体天皇です。『日本書紀』『古
事記』は、継体天皇の祖先を応神天皇としています。誤伝ですね。作為的なモ
ノでしょう。

また、ヤマシロ・フチの娘のカリハタトへも入内して、ミ
ヲヤワケと、エイシタリヒコ、オタケワケのお三方をお産み
になります。



か?)など諸国にイケミツ(用水池)を掘らせるのでした。ナリワビ(仕事)も増えて、タ
ミ(国民)も豊かになるのでした。

③7・32 37年(アスス725年)ハツヒ(1月1日)ヲミエ(15)の日に、ヨツギミコ
(立太子)の宣言がなされます。タリヒコ(後の景行天皇)さんは18歳でした。

③7・32 39年(アスス727年)メツキ(10月)オソキネさんはウチミテ【詳細は未詳】、
チツルギ(千本の剣)を作りましてアカハタカトモと名付けます。オシサカに置きます。オ
ソキネさんは、この際に、シトリへ、タテへ、オホアナシ、ユミヤ、ハツカシ、タマヘカミ、
アマのオサカへ、チノ、ヘキへ、タチハカセへ、の10のシナへ(技術の氏)を合わせて賜
るのでした。ニシキミコ(オソキネ)さんは、チツルギをオシサカからイソノカミ(石上神
社)に移します。カミ【詳細は未詳】がカスガ(カスガラキミの子孫か?)のイチカワに納めさ
せよとツゲがありました。ニシキミコ(オソキネ)は、イチカワをツカサとなさいますので
した。

ミツルナビ

⑤ カスガラキミは5代のカエシネのキミ(考昭天皇)のミコでカスガのカハネ(姓)を下賜されています。ワニ
クニフクやシホノリツが子孫にでています。このカスガラキミと、アマノコヤネの子孫のカスガと、取り違えやすい
です。

③7・35 64年(アスス754年)はサミタレ(梅雨の長雨)が40日降り続けました。イ
ナタ(稲田)はミモチ(いもち病)に痛み枯れつつありました。イクメのキミ(垂仁天皇)
に告げましたところ、キミは親(みず)からカセフのマツリ(風を吹かせて晴れを招来す
る)を執り行われるのでした。お陰で、ミモチも直りクニも豊かでした。

③7・37 87年(アスス767年)のキサラク(2月)5日に、兄のニシキイリヒコ(オソキ

ネ)は妹のヲナカヒメに言いました。

「我れは、老齡にてミタカラ(イクサウツワ、石上神社)の守りを離れました。あとは、あなたが守って下さい」

ヲナカヒメは、拒否して答えます。

「タオヤメ(女性の力弱き)の、ホコラ(神社)高くて」

ミツルナヒ

③ 類語の区別をいろいろ考えたりします。ミヤ、トノ、

ヤヒロのトノ、ムロ、ウツムロ、ヤ、ヤシロ、カミのヤシロ、タチ、ホコラ、ヒトアカリヤ etc.

ニシキミコは、なお、妹のヲナカヒメに頼みます。

「高ければこそ。(意義が深い)」

我が作る カミのホコラも カケハシのまま」

と、ウタに訴えたのでした。そこで、ヲナカヒメもミタカラの守りを一応は引き受けるのでした。ですが、モノヘ(後の物部氏)のトチネにすぐ授けて引き渡す事にしましたのでした。

37・40

タニハ(丹波)のミカソの家にいたイヌ(犬)のアシユキが、ムジナ(アナグマか?)を食い殺しました。すると、ムジナのハラからヤサカニのタマがでてきました。そこで、イソノカミ(石上神社)にこのタマを納め置きました。

37・41

88年(アスス778年)のフミ(7月)10日に、イクメノキミはミコトノリを出されます。

「われ、聞く昔の事に、シラキ(新羅)のミコ(ヒホコ)がツト(土産物)のタカラモノを、タシマ(但馬)に納め置いたとのこと。今に見たいものだ」

そこで、ヒホコのヒマコ(子孫)のキヨヒコにサオシカ(勅使)を遣わしました。キヨヒコは、タカラモノを持って参上して奉ります。

1、ハホソ

2、アシタカ

3、ウカガ・タマ

4、イツシ・コカタナ

5、イツシ・ホコ

6、ヒカガミ

7、クマノ・ヒモロケス

8、イテアサのタチ

の8品でした。このうち、イツシ・コカタナだけを残し置いて袖に隠して佩(は)き出でました。キミは、知らずしてミキをキヨヒコにミキ(お酒)を賜うのでした。ヒヨヒコが頂戴したミキ(お酒)を飲みましたところ、肌身より落ちてイツシ・コカタナが現れました。キミは、おっしゃいます。

「それなんソ(ぞ)」

キヨヒコは、隠しえず申し上げます。

「ササク(捧げる)タカラのタクイ(類)なり」

キミは、答えて。

「アに離れサル(ざる) タクイ(類)かと」

キヨヒコは、これも、捧げるのでした。

納め置いた8品のタカラモノを、後に開いて見ますと、またイツシ・コカタナだけが無くなっていました。キミはキヨヒコを召して問います。

「若（も）しも、イツシ・コカタナはそちらに行っているのでは？」
キヨヒコは答えて申し上げます。

「先の年の暮れの事でした。コタチ（イツシ・コカタナ）は自ら来たりました。その、翌日にはまた何処ともなしに消え失せました」

イクメのキミは、カシコミ給うのとして、最早それ以上はお問いになりませんでした。その後、イツシ・コカタナは自のずからアハチ（淡路島）移り行きますと、カミとして祭られましてヤシロも建てられました。

37・48 90年（アスス780年）キサ（2月）1日に、ミコトノリを述べられます。

「カク（日本固有種の蜜柑）を求めに、タシマモリ（キヨヒコ）に命じます。トコヨ（ヒタカミ、東北地方）に行けよ。」

吾（わ）が想う、クニトコタチのミヨ（トコヨクニの建国の当時）のハナ（華はなしさ・花）」

ミツルナビ

③ トコヨを『日本書紀』『古事記』は「常世国」と漢字直訳しています。このため、どういふ問題が起きたか？と言いますと、つまりタシマモリは「あの世」に行ったことにされてしまったのです。

37・49

99年（アスス789年）のサシエ（7）の年の事でした。アフミ（7月）1日にイクメのキミ（垂仁天皇）はお亡くなりになりました。御歳137歳でした。ミコのタリヒコ（ラシロワケ・のちの景行天皇）さんはモ（喪）ハ（衣服）を召されての48日の後、ハニタテモノ（ハニワ、埴輪）をミササギの周りに立てます。シハス（12月）10日にイクメのキミのお見送りです。タビ（足袋 か？）も力カヤク（輝く）カミのミユキです。

ミツルナビ

③ 古墳から金の飾りのついた足袋・靴が出土しています。この事を指しているのでしょうか？

37・51

明くる年（アスス788年）の春のヤヨイ（3月）に、タシマモリがヒタカミから帰ってきました。トキシクのカク（日本固有種の蜜柑）の実を24カコ（籠）。カクの樹を4サホ。カクの株を4サホ。土産物は充実してました。ところが、タシマモリの持ち来る間に、キミはミマカッテ（崩御）してしまわれました。タシマモリは、土産物の半分をワカミヤ（ラシロワケ、景行天皇）に捧げて、半分はキミのミササギ（御陵）に捧げるのでした。そして、嘆いて言います。

「このカクを得る為に、遥かに行きましたるトコヨ（ヒタカミ）とは、カミ（クニトコタチの昔の尊き勢田氣）の隠れつつあった素晴らしいところでした。「常世国」では大誤訳！フリ（風習）を馴染むために10年は掛かりましたのでした。凌（しの）ぎ凌ぎの10年でした。漸（ようや）くに帰り得ましたのは、スヘラギ（天皇陛下）のクシヒ（余勲）に因ったことで御座います。しかし、帰りました今、キミは既に去られてしまわれたのでした。もはや、トミ（わたくし）生きて何かせん（為す）」

と、嘆いて、タシマモリはオヒマカリ（殉死）をしてしまうのでした。諸人もナンタ（涙）で、カクの苗木を4本トノマエ（ラシロワケさんのミヤ）に植えて、あと4本の苗木はスカハラ（菅原のミササキ、奈良市尼辻町）に植えるのでした。

タシマモリのノコシフミ（遺し文）を、ミコ（ラシロワケ、景行天皇）が見賜いまして、

ハナタチハナヒメの事をお知りになります。ハナタチハナはタシマモリのツマになっていたのです。タシマモリがオヒマカリをしてしまったために、寂しくなったハナタチハナを召し寄せます。オシヤマが使者になりました。オシヤマはタシマモリによく似ていました。(親戚かも知れませんが)

父の力クのもとヒコ(厚木のあたりの有力者。オオヤマスミの子孫か?)と供にハナタチハナヒメはミヤコに上って来ます。ミコ(ヲシロワケ、景行天皇)はお喜びで、もとヒコにユルシハ(高位の正装服)を賜わって、タシマモリのモ(喪)を務めます。

^{37・57} サツキ(5月)を待つヨハ(夜半 か? 4月の末日)にハナタチハナヒメは、子供を産みます。そこで、ミコ(ヲシロワケ、景行天皇)はミコトノリをおっしゃいまして命名をなさいます。

「昔の人(タシマモリ)のヲ(タマノヲ)をトトム(留どめる)ので、ヲトタチハナと名付けましょう」

そして、タシマモリに姿の似たオシヤマに、母子を嫁がせられたのです。深きユカリ(由緒)のためでもありますでした。

ミツルナビ

③ オシヤマの忍山神社は、三重県亀山市野村町の鎮座。辻公則さんに教えてもらいました。ヲトタチハナは、ヤマトタケのおキサキになられます。深きゆかりです。